

第20章 「倭の五王」の倭国（倭説）

1 倭国の樹立

(1) 「倭城」からの逃亡（3回目）

「390年」に大凌河上流の「北平郡」で事件が起きる。

（孝武帝太元十五年（390年））九月、北平人呉柱聚衆千餘、立沙門法長為天子、破北平郡、転寇廣都、入白狼城。『資治通鑑』

（訳）北平人の呉柱は衆千餘を聚（あつ）めて、沙門の法長を立てて天子と為し、北平郡を破り、転じて廣都を寇（おか）し、白狼城に入る。

「390年」に「北平人の呉柱」は「北平郡を破る」とある。

「倭城」は「北平川」にある。「倭城」の人々はこれに巻き込まれる。「倭王讃の父」はこの時殺されたのであろう。息子の「倭王讃と珍」は「筑後」に逃げて来て「倭国（倭の五王）」を建国する。

「倭城」からの「3回目」の逃亡である。全住民が逃亡したのであろう。「倭城」は消滅する。

(2) 「倭国」の樹立

「讃・珍」はおそらく「福岡県八女郡広川町一条」に渡来したと思われる。

「倭王讃」の墓は「広川町一条」にある「石人山古墳」である。

「石人山古墳」は「広川町一条」を見下ろすような丘の上に築かれている。

五代目の「倭王武」の墓は「八女市」の「岩戸山古墳」である。「倭国」の位置が「広川町」から「八女市」へ移っている。

□卑弥呼の「倭国」と「倭の五王」の「倭国」

- 「卑弥氏」は「倭国」を称する。
- 卑弥呼の「倭国」……238年～270年頃
- 「倭の五王（卑弥氏）」の「倭国」……390年～531年

2 「倭の五王」による全国支配

(1) 「倭王武」の上表文

「478年」に「倭王武」は宋へ朝貢する。『宋書』「倭国伝」にその時の上表文が載っている。

順帝昇明二年、遣使上表曰、封国偏遠作藩于外。自昔祖禰躬擐甲冑跋涉山川不遑寧処、東征毛人五十五国、西服衆夷六十六国、渡平海北九十五国。王道

融泰廓土遐幾累葉朝宗不愆于歲。臣雖下愚忝胤先緒驅率所統歸崇天極道遙。
百濟裝治船舫而高句麗無道……。『宋書』倭国伝

(訳) 順帝の昇明二年(478年)、(倭王武)使いを遣わし上表して曰く、「封国は偏遠にして藩を外に作る。昔より祖禰躬(みづか)ら甲冑をつらぬき、山川を跋涉し、寧処(安心して生活する)に遑(いとま=ゆとり)あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平らげること九十五国。(中略)。臣は下愚なれども忝(かたじけなく)も先緒を胤(つ)ぎ(後略)」という。

「東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平らげること九十五国。」とある。「日本列島」を統一し、「朝鮮半島」まで征服している。

- 「390年」に「倭城」から「讃・珍」が渡来して、「478年」までには「日本列島」および「朝鮮半島」まで支配する。(53号、62号、65号)
- 「日本列島」を完全に支配した最初の「王権」である。

(2)「倭隋」は「平西将軍」

「倭王珍」は宋王朝へ朝貢する。

太祖の元嘉二年(425年)、讃、又司馬曹達を遣わして表を奉り、方物を献ず。讃死して弟の珍立つ。使いを遣わして貢獻し、自ら使持節・都督、倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍・倭国王と称し、表して除正せられんことを求む。詔して安東將軍倭国王に除す。珍、又倭隋等十三人を平西・征虜・冠軍・輔国將軍の号に除せんことを求む。詔して並びに聽(ゆる)す。『宋書』倭国伝

「倭王珍」は「13人の將軍」を「宋王朝」に認めさせる。

「倭隋」は「平西將軍」であろう。「13人」の將軍の中で「倭隋」だけが名前がある。

「倭隋」は筆頭將軍であろう。

『宋書』は「倭王讃」を「倭讃」と記す。「倭隋」は「倭王」と同族であろう。

○「倭王讃・珍」と「倭隋」は従兄弟であろう。

3 「倭の五王」による全国支配の検証

(1)「倭王珍」による西日本への進出

高木恭二氏は「九州の刳拔式石棺について」(『古代文化』1994年5月号)の中で「九州から運ばれた石棺」の中で次のように述べている。

畿内地方での長持形石棺の使用が終焉を迎えるのは5世紀後半頃で、恐らくそれに替わって登場したのが九州の舟形石棺であつたろう。初めは北肥後Ⅰ型舟形石棺であつたが、5世紀の末頃になってそれは中肥後型舟形石棺に取って替わる。

高木恭二氏

図34 九州から運ばれた石棺

(62号 p79)

畿内では「5世紀後半ころ」に「長持形石棺が消滅」し、それに替わって「九州の舟形石棺」が登場するという。近畿地方は「九州の勢力」が支配するようになる。

- 「北肥後Ⅰ型舟形石棺」…熊本県の菊池川下流域で造られた阿蘇溶結凝灰岩製舟形石棺
- 「中肥後型舟形石棺」…熊本県宇土市付近の阿蘇溶結凝灰岩（ピンク石）で造られた舟形石棺

「倭王珍」の在位は「427年～442年」である。「5世紀第二四半期」の倭王である。「倭王珍」は「江田王」の二代目を連れて、瀬戸内海（四国ルート）を征服し、大阪（古市古墳群）まで征服する。（図34）

江田王の二代目は古市古墳群の「墓山古墳」を造った工人に「倭王珍」の墓「太田茶臼山古墳」を造らせる（76号）。

江田王の二代目の墓は「市野山古墳」である。その陪塚に「唐櫃山古墳」「長持山古墳」がある。どちらも「阿蘇凝灰岩」で造られた「舟形石棺（家形石棺）」である。石棺は菊池川下流域から運ばれている。

□「5世紀第二四半期」の「倭王珍」の時代に「瀬戸内海（四国沿岸）」ルートを開き、「大阪（古市古墳群）」まで征服する。

- 畿内では「5世紀後半ころ」に「長持形石棺が消滅」し、それに替わって「九州の舟形石棺」が登場する。

(2) 宇土王による畿内地方の征服

高木恭二氏は「5世紀の末頃になってそれは中肥後型舟形石棺に取って替わる」と述べている。

「倭王済」の在位は「443年～461年」である。晩年に「ワカタケル（倭王武）」が生まれる。「倭王済」は親戚の「江田王」に「ワカタケル」の養育を委せる。「江田王」は「武官」から「文官」に替わる。「江田船山古墳」から出土した鉄剣には「典曹人」となっている。

新しく「武官」になるのは「宇土王」である。「宇土王」は「畿内」を征服する。

畿内には「宇土」の「ピンク石製石棺」が普及する。(図34)

表2 宇土半島の阿蘇石製石棺

(62号 p111)

(3)「倭の五王」の墓

上表文に「昔より祖禰躬（みづか）ら甲冑をつらぬき、山川を跋涉し、寧処（安心して生活する）に遑（いとま＝ゆとり）あらず」とある。「倭の五王」は全国を征服する。

「倭の五王」の墓は全国に造られる（71号、76号）。

□「倭の五王」の墓

- 倭王讃 石人山古墳（福岡県八女郡）
- 倭王珍 太田茶白山古墳（大阪府茨木市）
- 倭王済 岡ミサンザイ古墳（古市古墳群）
- 倭王興 稲荷山古墳（埼玉古墳群）
- 倭王武 岩戸山古墳（八女市）

□「倭の五王」は日本列島を支配する。

- 「東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平らげること九十五国」とある。

4 「倭の五王」と年号

(1)「倭王武」と年号

「倭の五王」は即位すると直ちに宋王朝へ朝貢する。

「478年」に「倭王武」も即位すると直ちに宋王朝へ朝貢する。ところが翌「479年」に宋は「斉」に禪位する。「倭王武」は直ちに「斉」に朝貢する。

「502年」に「斉」は「梁」に禪位する。「倭王武」はまたも直ちに「梁」に朝貢する。中国王朝はめまぐるしく交代する。中国王朝は頼りにならない。

「倭王武」は中国王朝から独立することを考える。自ら「天子」になり、「年号」を建てる。「善記」である。

○「倭王権（倭の五王）」の年号

- 善記（522年～525年）倭王武の年号
- 正和（526年～530年）倭王葛の年号
- 定和（531年～537年）倭王萬の年号
- 常色（538年～545年）：

「倭王武」の「善記」年号から日本の年号が始まる。

「九州年号」と云われている。

(2) 中国王朝への朝貢の中止

「倭王武」は自ら「天子」になる。中国王朝への朝貢は中止する。

「502年」に「倭王武」が「梁」に朝貢したのを最後に「日本」からの朝貢は無くなる。

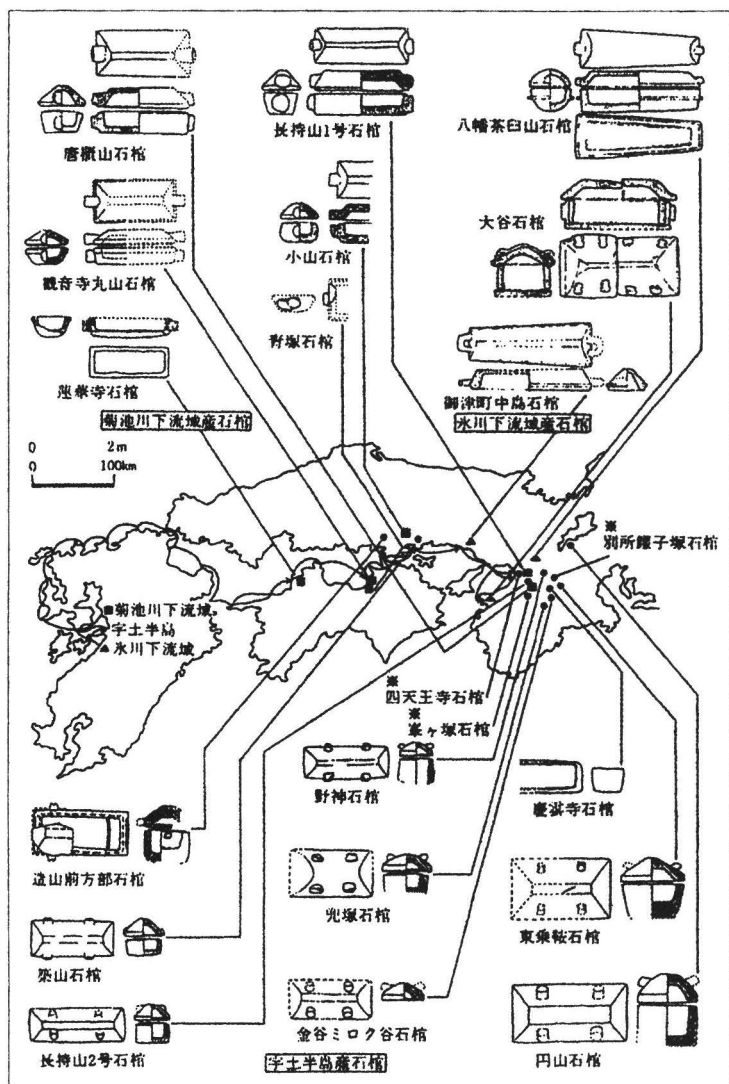


図34 九州外阿蘇石製石棺の分布 (高木恭二 1993年)

表2 宇土半島産の阿蘇石製石棺

(高木恭二氏「阿蘇石製石棺の分布とその意義」

(『継体大王と越の国』(福井新聞社)より)

宇土半島産の阿蘇石製石棺(今城塚石棺をその後追加)

No.	古墳・石棺名	所在地	墳形・規模	埋置施設	石棺形式
7	造山古墳前方部	岡山市新庄下	前方後円墳360	不明	舟形石棺
8	築山古墳	岡山県邑久郡長船町	前方後円墳90	竪穴式石槨	舟形石棺
9	長持山2号石棺	大阪府藤井寺市沢田	円墳20	竪穴式石槨	舟形石棺
10	峯ヶ塚古墳	大阪府羽曳野市軽里	前方後円墳98	竪穴式石槨	舟形石棺?
11	今城塚古墳	大阪府高槻市郡家新町	前方後円墳190	横穴式石室?	家形石棺
12	野神古墳	奈良市京終町	前方後円墳	竪穴式石槨	舟形石棺
13	別所鑑子塚古墳	奈良県天理市別所町	前方後円墳47	竪穴式石槨	舟形石棺
14	東乗鞍古墳	奈良県天理市乙木町	前方後円墳72	横穴式石室	家形石棺
15	金屋ミロク谷	奈良県桜井市金屋	不明	不明	舟形石棺
16	兜塚古墳	奈良県桜井市浅古	前方後円墳50	竪穴式石槨	舟形石棺
17	慶雲寺石棺	奈良県桜井市大三輪町	不明	不明	舟形石棺
18	円山古墳	滋賀県野洲郡野洲町	前方後円墳37	横穴式石室	家形石棺
19	甲山古墳	滋賀県野洲郡野洲町	円墳	横穴式石室	家形石棺
20	四天王寺礼拝石	大阪市天王寺区	不明	不明	転用材?

第21章 「第1部」のおわりに

1 「大彦」の子孫

(1) 「大彦」と「倭の五王」

『日本書紀』は「大彦」の子孫を次のように記す。

大彦命は阿倍臣・膳臣・阿閉臣・狹狹城山君・筑紫国造・越国造・伊賀臣、
凡そ七族の始祖なり。『日本書紀』孝元紀

『日本書紀』は「筑紫国造」としている。しかしこれは「倭の五王」である（54号、62号、古代史の復元⑤『倭の五王と磐井の乱』）。

『日本書紀』も「倭の五王」の始祖は「大彦」とすると記す。

「大彦」は「倭城」の「卑弥氏」である。「大彦」は「崇神天皇（扶羅）」を助けて、日本列島に渡来する。その後「越（北陸）」に派遣される。「越国造」は大彦の子孫であろう。

「阿倍臣・膳臣・阿閉臣・狹狹城山君・伊賀臣」も「大彦」の子孫であるから、これらの氏族も「卑弥氏」である。

2 「天氏」と「卑弥氏」の渡来ルートとDNA

(1) 「天氏」と「卑弥氏」の渡来ルート

「天氏」も「卑弥氏」も「呉」地方に居た。

「前473年」の「呉越の戦い」で呉は越に伐たれて滅びる。「天氏」も「卑弥氏」も北へ逃げる。

○「天氏」と「卑弥氏」の渡来ルート

- 「天氏」は「前300年～前200年」頃まで「渤海沿岸」で「箕子朝鮮」と混血して、行動を共にしている。
- 「卑弥氏」は「前300年～390年」まで「大凌河上流」の「倭城」に居て、日本列島（筑後）に渡来する。「約700年」間も「倭城」に居る。

(2) アジアの人類集団の移動ルート

「DNAの国際研究」が行われた。「2009年12月11日の朝日新聞」は次のように伝えている。

日本・中国・シンガポールなど10ヵ国・地域、90人以上の科学者の共同研究。
アジア太平洋地域の約70民族・集団の約2千人を対象に約6万カ所のDNA
の塩基配列を比較分析した。（DNAの国際研究）

図35 日本人の祖先の渡来ルート

「図35」を見ると、「渤海沿岸ルート」とその北に「ルート」がある。「大凌河ルート」である。

「渤海沿岸ルート」は「天氏」の渡来ルートであり、「大凌河ルート」は「卑弥氏」の渡来ルートである。

朝日新聞の図の説明には「先史時代の…」とあるが誤りである。現代人のDNAを調べている。

現在、渤海沿岸に居る人々のDNAの中に「現代日本人」と同じ「DNA」が入っていると言うことを示している。

「大凌河ルート」も同じである。「卑弥氏」は「倭城」に「前300年～390年」の「約700年」も住んでいる。近隣の人々と当然混血して居るであろう。「卑弥氏」は日本列島に渡来したが、混血した人々は大凌河流域に残っている。その人々の「DNA」を調べている。

□「倭人（天氏）」と「倭人（卑弥氏）」の「二つの渡来ルート（佃説）」はDNAの研究により証明されたとと言える。

3 「現代日本人」の形成

(1) 弥生時代の日本列島人の核DNA

2018年12月23日のNHK「サイエンスZERO」で「日本人の謎」が放映された。その中で「弥生時代の日本列島人の核DNA」が「図36」を使って説明された。

図36 弥生時代の日本列島人の核DNA

- 「岩手・弥生人」は「縄文人」であろう。
- 「長崎・弥生人」も「縄文人」に近い。「倭人（天氏）」の血が少し入っているであろう。「西北九州タイプ」の弥生人である。
- 「福岡・弥生人」は「倭人（天氏）」であろう。

(2) 「二重構造説」

現代日本人は「縄文人」と「弥生人」が混血して出来たという「二重構造説」が定説になっている。

しかし、そうであれば「図36」の「現代日本人」の位置は「縄文人」と「福岡・弥生人」の中間に来るはずである。ところがむしろ「福岡・弥生人」よりも「韓国人」や「中国人」の方に近くなっている。

「二重構造説」は「核DNA」により誤りであることが判明した。

(3)「現代日本人」の位置

「現代日本人」の位置が「韓国人」や「中国人」の方に近くなっているのは「倭人（天氏）」や「倭人（卑弥氏）」が渡来した後に「中国」や「朝鮮半島」から多くの渡来人が来ている証拠である。

○「弥生時代」以降の渡来人

- 「285年」ころ中国の大凌河上流から「大彥」が「崇神天皇」を連れて日本列島に渡来する。
- 「340年～362年」ころには「多羅氏」が大量に渡来して「和気（別）」や「宿禰」の称号を日本列島にもたらす。
- 「390年」には「倭王讃・珍」が「倭城」から渡来して「筑後」に「倭国」を建国する。

さらに「660年」の「百済の滅亡」や「668年」の「高句麗の滅亡」の時にも多くの逃亡者が日本列島に渡来する。

これらの渡来人の「DNA」が現代日本人の中に入っている。

□「現代日本人」の形成

「核DNA」の分析により、「現代日本人」の形成は次のようになっている。

- 「渡来系弥生人」（天氏）……………80%
- 「縄文人」……………10%
- 「古墳時代」以降の渡来人……………10%

□「倭人（天氏）」が「現代日本人」の基盤になっている。

- 「天孫降臨」により、「日本人」の基盤が形成された。
- 「渡来系弥生人（倭人（天氏）」により、「日本語」がもたらされた。



図35 日本人の祖先の渡来ルート

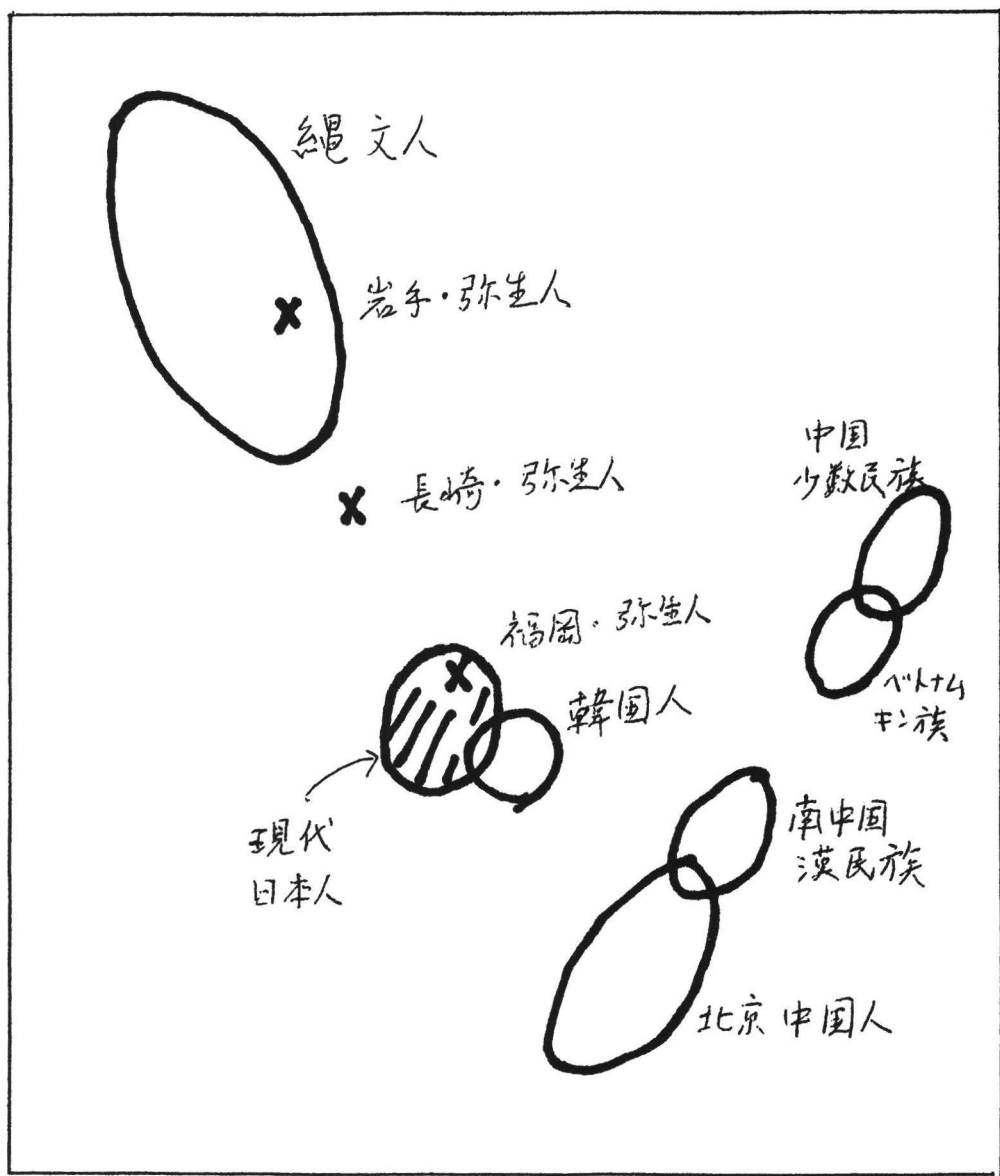


図36 弥生時代の日本列島人の核DNA